が、当時名門であった「関東商工」に、準々決勝で惜敗したが、東京都ベント・エイトに入り、都立高校としては輝かしい成績を残した思い出がある。

翌年、我々の学年が、山広主将を中心に部を引継いだわけであるが、中山選手等優秀な後輩を迎えたわりには、前年に比べて大した戦果も得られず、後輩に引継いだ印象が残っている。

勿論、荻村先輩を始め、諸先輩が建てられた立派な伝統を守るべく、全員一生懸命頑張ったわけだが、ただ、がむしゃらに卓球をやったという記憶が強く、夏の合宿を思い出しても、朝の「井ノ頭公園」一周のマラソンから始って、夜の「エスカレート・マッチ」（トーナメント方式の対内試合、勝つと順繰りに上位の台で試合ができる。確か男女一緒になってやった思い出がある。）まで、一日中、ひたすらに卓球に打込んだ思い出が残っている。

何か、幹事の方のご要望に応えられる様な面白いエピソードを思い出そうと努力してみたが、どうも、練習が終ると必ず皆で立寄った「目の出屋」のおばさんの顔ばかり浮んで思い出せないので、駄文はこの位でやめさせていただきたい。

最後に、我々にいつも心をかけ、卓球部を盛りたてて下った、藤崎先生他、諸先生、荻村先輩他、諸先輩に、改めてお礼を述べると共に、我々西高卓球部が、三十周年を機に、増々発展することを願って、終りとさせていただきたい。

親睦と熱意

十八期生　中山　雅彦

われわれ十八期生は昭和三十八年四月に西高卓球部に入部、同年十月の西高記念祭の後に部長、マネージャーなど役員の交代があり、翌年の十月までの一年間が中心となって活動した時期であった。この後は卓球を続けたい者は残り、勉強をしたい者は現役から離れてもよいことになっていた。したがって、レギュラーの構成員は常に一、二年生であり、三年生が残っていることは稀であった。団体戦のチーム編成はA、Bの二チームあったがAチームは全員二年、Bチームは一、二年混合であり、戦力は卓球部の総力というよりも二年生の力によって決まった。

対外試合ではあまりよい成績はなく、高体連の試合はほとんどが三回戦以内で敗退していた。一度だけマネージャーの中島が六回戦まで進み、中シードをとったことがあった。しかし、第三学区都立戦（十四～十六校ぐらいあった）では弱者同志の争いではあったが、常に上位の成績を残しており、満足感を得ることができた。都立戦は二月と十月にあり、十月の大会は二年生にとっては最後の試合であった。われわれ

が初めて優勝の喜びを味わったのがこの大会の団体戦であった。現役最後の試合とあって二年生全員の意気込みはすごいものがあった。それだけに小さな大会ではあったが今だにその感激は思い出すことができる。

優勝までに二回ほどきわどい試合であったが、とくに決勝戦はスコア上は全く危うかった。シングルス四、ダブルス一のゲームで最初にシングルス二つを落としたからである。しかし、気持の上ではゲームが始まる前から相手を圧倒しており、〇―二となっても負けるような気はしていなかった。次のダブルスとシングルス二つを勝って三―二と逆転して優勝した。われわれの感激をより大きくしてくれるために仕組まれたようなゲームであった。

終り良ければ全て良しではあるが、今、考えてみると練習方法にしても、試合にのぞむ態度にしても、もう少し何か工夫ができなかったものかという後悔がある。このようなことはすべてのことについて言えることであるが、当事者でなくなってみて初めて気がつくということがある。例えば、基礎技術の練習をただ何となくしていたとか、実戦練習は練習試合が大部分であったことが思いあたる。練習時間が週三回（土曜日を含む）と、私立高校などと比べると少なかったことを考えると、西高式練習が必要であったと思う。

一年半の卓球部生活でもいろいろな問題があった。はじめに指摘されたことは部室へ来ること、部誌を書くことなど部員相互間の親睦であった。そして、卓球に対する熱意の足りなさであった。みんながこれらのことで悩み考えたが、結局、親睦も熱意も不可決のものであり、さらに卓球への熱意と努力が勝利という形で実ってこそクラブ活動への満足が得られることを身をもって体験した。

昭和四十年十二月三日（部誌より抜粋）

卓球する自信と誇りを持ちたい。自信さえあれば卓球がより楽しくなり、そしてうまくなれると思う。クラブを休んでしまうということも、自信がないことからが多い。ずる休みでなく、何かの都合で一日休むと、次の練習日には何か抵抗を感じて出にくくなってしまう。それではいけないと思う、が、実際にはそうはいかない。先輩に指導してもらったり、上手な人とするときなどは、失敗をすることが頭について離れない。結局このことも自信のないことにつながる。だから先輩がぼくなどに指導してくれると、ほんとうにうれしく、すまない気持でいっぱいになる。以上のことから、つい、卓球の誇りを失ってしまう。「今日はよくはいるかな」というような小さなことを早くなくしたい。すでに十二月だというのに。

記、あるクラブ員